

## 十年後

今年の冬は寒いね。

ホワイト・クリスマスにならないかなあ。

家族四人で凍てついた空を見上げながら、実家に向かった。プレゼントやケーキの箱で、みなのお手はふさがっている。母や姉家族と一緒にパーティをするのが、いつのころからか恒例となっている。電車で四つ先の駅とはいえ、子どもが大きくなってから、家族全員で私の実家を訪れることはずいぶん少なくなった。

夫の妹家族も車でやってきて、総勢十四人。大学生を筆頭に男の子たちは一七〇センチを超し、みんなが立って動き回ると、狭くはないはずの実家がやたら窮屈に感じられる。

今までは、小さな丸椅子も総動員して、ギューギューになりながらも、全員で大きなテーブルを囲んでいた。ついに今年はそれをあきらめて、子どもたちにはリビング・ルームに低いテーブルが用意された。

仕切りやの高三の甥っ子が、今年の重大ニュースや来年の抱負などをひと言ずつ言わせている。ふだん口数の少ないうちの息子たちの声も聞こえてくる。おしゃべりな

姪っ子たちから茶々が入り、子どものテーブルには絶えず笑い声が響いている。大皿に盛りつけたチキンの照り焼きやサラダも、すでに残りわずかだ。

小さいころは、みんなでクリスマス・ソングを歌ったり、誰かがサンタクロースに扮したりと、子どもたちを楽しませるために親がいろいろ計画したものだ。

「大きくなったよねえ、みんな」

成長ぶりに感心しながら、ダイニング・テーブルにどっかと座る大人たちは、シャパンやビールでいい気分になっている。

姉の子ども二人とわが家の長男は年が近く、小さいころはよく一緒に遊ばせた。言いかせても理屈の通らない一歳二歳の時期、三人がひととところで仲良く遊んでいるのは、ほんの一瞬。すぐに好き勝手なことを始める。おもちゃの取り合いも始まる。そのうち誰かが部屋からよちよちと出て行ってしまふ。眠くてぐずりだす。姉と二人がかりでも手がたりなくて、母にもよく助けてもらった。

自分のための時間が増えて、子どもと向き合うだけの毎日に息が詰まることもあった。早く大きくなって手が離れないかと、いつも願っていた。けれど、今振り返ると、あのころの日々はなつかしく、いとおいしい。もう取り戻せないかと思うと、胸の奥がツーンとなる。

「ねえ、あれ、見て見て！」

誰かが声をあげた。

鴨居にかけられたその写真は、ちょうど十年前のクリスマス・パーティーのものだ。プレゼント交換をした直後で、サンタクロースの格好をした義兄が、子どもたちのまんなかに座っている。

当時小学三年生の長男は、もらったばかりの本をさっそくひろげて夢中になっている。大学生になった今も、活字好きは変わらない。両脇に大きなプレゼントの箱を抱えてニカッと笑っている次男は四歳。中学三年になっても、そのやんちゃな目つきはそのまま。うれしそうにVサインしている姪っ子たち。一番の年下、二歳の姪は、サンタクロースを怖々見つめている。

思わず吹き出してしまうほど、みな幼い。幼な顔からかいま見える性格の片鱗は、現在の姿にそのまま重なる。

「ズウタイは大きくなっても、なんだか変わらないなあ」

大人はそう言いながら、目を細めて写真をながめる。

「そうだ、これと同じように座って、写真を撮ろうよ」

もちろん、仕切りや甥っ子の提案だ。

それぞれが十年前と同じポーズをとる。今夜はやってこなかったサンタクロースの代わりに、おばあちゃんがまん中に座る。姉と私が写真と見比べながら指示を出す。もっとプレゼントをうれしそうに見つけて！ ダメダメ、笑いすぎ！

「また、十年後も撮ろうね」

大人は疑わしげに甥っ子を見る。

「今はそんなこと言ってるけど、イブは彼女と過ごすからとか、家族とクリスマスなんてありえねーとか、言いだすんじゃないの？」

もうすぐ子どもたちが離れていくことを、身をもって知っている。けれど、親は願う。十年後も、こんなふうに集まっていられたらと。

